

# プロフィールレポート

こんにちは、ツヨです。

僕は現在、

会社に勤めながらネットビジネスをしているしがない会社員です。

現在、成果も上がり始めてきてネットビジネスを通じて20万円を稼ぐことができています。

僕自身、

まさか自分がビジネスをするなんてことは思っても見ませんでした。

このままずっと会社員で人生が終わる

そんなふうに思っていました。

僕にとって、

ビジネスをする人っていうのは、天才だったり、才能があったり、  
運のあるやつしかできないものとはり思っていました。

そんな僕だが、ある出会いをきっかけにそんな価値観をぶっ壊され  
ビジネスを始めるようになります。

今回は僕の紹介ということで、

ここから僕の人生を遡って幼少期のころから話していこうと思いま  
す。

僕は、1994年4月にこの世に3人兄弟の3男として誕生した。

なんの苦労もなくスルンと生まれたらしい。

母曰く「あまり、泣かないし、おとなしいしで育児が楽だった」と  
言っていた。

ほったらかしていても何も起きないから苦労はなかったみたいだ。  
逆に、長男なんかは頻繁に泣いていたみたいで育児が大変だったみたいだ。

それに比べて僕はおとなしくしかも、  
3男ということで、育児にも慣れてしまい  
子供ができたという感動も薄れてしまっていた。

子育て＝愛情ではなく、  
子育て＝作業  
と化してしいた。

ほったらかしいっても大切に育てられた。

例えば、

僕が1歳の時、の冬。

寒いからといっておばあちゃんが僕を冷えないように毛布や布団で

くるまって温めてくれた。

ただ、何枚も何枚も毛布やら布団やらをくるんだせいで

くるまれた僕の体温がどんどん上昇。

そのせいで脱水症状になる。

家族全員パニック。

急いで救急車を呼び、

僕は救急車で運ばれていった。

病院のベッドの上で点滴を打たれながら目覚めたことを今でもしっ

かりと覚えている。

僕は大切にされ過ぎて病院送りにされた。

熱い愛情に僕が耐えられなかったんだろう。（笑）

そんな僕だけど、  
身体は頑丈にできていた。

しょっちゅう階段から落ちていく（転がっていく）  
ことがあったのだから

毎回どこもケガをすることなく、  
何事もなかったかのようによちよちと歩いていた。

さらに、  
母と一緒に車で買い物に行った時僕は車から落ちたことがある。

母が運転中、  
僕は、「のどがかわいたー」と言い、  
後部座席のチャイルドシートの外して、  
助手席にあるお茶を取りに立ち上がっていた。

丁度その時である。

母は、前の車とぶつかりそうになり急ブレークを踏んだ。

急ブレーキを経験したことがある人なら分かると思うが、  
かなり衝撃がくるんですよ。

慣性の法則が働いて、

すごい力で引っ張られ体が持っていられる。。

それは、僕も例外じゃない。

僕もかなりの力で引っ張られた。

しかもその時は、

車の中でお茶を取ろうと立ち上がった瞬間に。

当時3歳ということで体が軽く

衝撃を踏ん張る足腰もない。

僕は衝撃に負けて体が吹っ飛んだ。

これは比喻とかそんなじゃない。

物理的に吹っ飛んだのだ。

そして、

僕は車のバックドアまで吹っ飛ぶ。

普通なら、

バックドアにぶつかって終わるのだが。

そこから悲劇が起こった。

なんと、バックドアをそのまま

ぶち破り車から放り出される。

そして、10メートルぐらい道路を転がります。

この時、母も最初は何が起きたのか分からなかったみたいだが、

後ろを見たら僕が消えている。

&バックドアが開いている。

&後ろの方でなんか転がっている。（僕です）

ということですぐに状況を把握。

車を止め急いで僕の元に駆け寄ってきてくれた。

そしたら、

僕は何事もなかったかのように立ち上がって車に戻っていったそう

な。



その時のことを母曰く

「あのときは、焦ったわー。でもどこもケガしてなかったよ。あつでも、おしりがちょっとすりむいていたかな？」

という結構軽いノリで話してくれた。

自分で言うのもなんだが、

赤ん坊のころの僕は無敵だったと思う

親がほっとくのも納得できてしまう。

ちなみに僕はこのときのことをはっきり覚えていて

この事故以来、車が嫌いになる。

それが現在（24）も続いている（笑）

無敵な赤ちゃん時代を過ごし、

そして、幼稚園に上がる。

身体は相変わらず頑丈で外でよく遊んでいた。

遊ぶことが大好きでいつも走り回っていた。

だけど、不器用で、勉強も苦手だった。

幼稚園ではよく折り紙を折るということをさせられる。

先生の真似をして折り紙を折っていくという授業？なのだが、

僕にはそれができなかった、

何度も何度も折り直す、やり直す。

そのせいで、折り紙がどんどんぐちゃぐちゃになる。

途中で破けてしまうこともあった。

せっかく、完成しても、

よれよれのになった「つる」、

ぼろぼろの「カブト」。

ぐにゃぐにゃの「手裏剣」

飛ぶ気配すら感じられないぐしゃぐしゃの「紙飛行機」

僕の作るものはみんな変な形になる。

見た目がめちゃくちゃカッコ悪くなって毎回ショックを受けていた。

だから、うまくできている子が羨ましかった。

あまりにうまくできないから、

泣きながら折り紙を折ることが頻繁にあった。

先生が心配になって

「どうしたのーつよくん」と言ってきてくれる、

そして事情を理解した先生が「じゃあ、一緒に折ろうか」といって  
一緒に折る。

それでも、なぜかぐちゃぐちゃになる。

先生もさすがに苦笑。

僕、さらに泣く。

それだけじゃない。

僕は、文字や数字を覚えるのが明らかに誰よりも遅かった。

周りの子たちは少しひらがなの読み書きができていた。

それに対し、僕は1文字も読むことも書くこともできないでいた。

ひらがなでも僕にとっては、解読困難な魔術書だ。

「読めない」なんてレベルじゃなくって「線」がそこにある。

くらいにしか分からなかった。

だから、隣の子が字を見て「ね・こ」と言っても、

「何言ってるんだろう・・・」としか思わなかった。

はじめは、

何とも思っていなかった。

ただ、友達がどんどん、

ひらがなを読める、書ける子が増えてくると焦り始める。

なんでみんな読めるの・・・

なんでみんな書けるの・・・

自分だけ1人ぼっちになったみたいな

不安で埋め尽くされていく

だから、

「ぼくも、みんなみたいにがんばる！！」

みんなに追いつこうと必死で読み書きを練習するようになる。

まずは、書き。

ひらがなは難しいからまずは数字からやろうとする。

ただ、数字を書くことさえも不器用な僕にとってはかなり難易度だった。

「1」を書くにしても線をまっすぐ書くことができなかった。

字がへによへによに曲がってへビみみたいな「1」が出来上がる。

そして、「2」、「3」とやっていく。

カーブのところでどうしてもへによへによになってしまうが、

まあ、なんとか読めないことはない

そのくらいの出来だった。

そして、僕が一番覚えるのに苦労した数字それが「8」。

始め見た時は。「なにこれ」と絶句した。

どうやって書けばいいんだ・・・

上と下に丸をかいてごまかして書いていたが、

それでも「8」には見えなかった。

先生に「あっ雪だるま上手に書けたねー」と言われた時はショック

のあまり泣いた記憶がある。

「8」はだけはどんなに頑張っても書くことができなかった。

「8」を書けるようになったのは小学生上がってからだったと思う。

そういえば、

幼稚園の時結構泣いていたな。（笑）

身体は丈夫だけど、メンタルは豆腐並みに弱かった。

- ・雷が鳴りだして、怖くなって泣く。
- ・幼稚園の給食がマズ過ぎて泣く。
- ・先生と話しただけで緊張して泣く
- ・先生に褒められても恥ずかしさのあまりか泣く。
- ・ハチが出てきて怖くて泣く
- ・猫が近くに寄ってきただけでも泣く。



超泣き虫だったなー。

鉄壁の肉体に守られたスーパーマンとは裏腹に

小心者ですぐ泣いてしまう泣き虫というのが僕の本性だった。

泣いてばかりの幼稚園生活。

だけど体が頑丈なだけあって、運動能力は高かった。

幼稚園の時かけっこで誰にも負けたことがなかった。

そのおかげで、

幼稚園の卒園式の行事として最後に組どうしで

リレーをするのだが、そこで僕はアンカーに勤める。

そしてリレーがスタートする

どの組も拮抗していて追い抜いたり追い抜かれたりの大接戦。

運動場は大盛り上がり。

そして、

僕の番がやってくる。

僕の組が2位という順位でバトンを渡される。

バトンを渡されたと同時にスタートダッシュする。

そして1位の子を追い上げる。

僕の足の速さは、

幼稚園児にしては群を抜いていた。

だから、

すぐ1位の子に追いつきあっというまに抜き去る。

そして歓声上がる。

そしてそのまま1位を維持してゴールテープを切る。

僕がゴールをして会場がさらに大盛り上がり。

僕はこの時、

ヒーロになった。

先生や僕と同じ組の子たちが抱き着いて僕を褒めてくれる。

周りの親たちも、

「すごかったねー」

と僕を褒めてくれた。

この時は

めっちゃうれしかったなー。

このときは不可能なんてない。

僕にできないことはない。

とさえ思えた。

という感じでヒーローという最高の状態で僕は幼稚園を卒園して  
いく。

そして小学生に入学。

憧れの小学校。

憧れの小学生。

ピッカピカのランドセルがうれしくて小学校に行く何週間も前から  
ランドセルを背負っていた

食事中でもおかまいなく背負って親に何度も注意されていた。

小学生に上がることで胸を膨らませていたが、  
実際に入学をしてみるとその期待は崩される。

勉強である。  
幼稚園の時は勉強の時間というのは少なかった。

外で遊ぶことが勉強みたいなものだったから。

逆に小学生はモロ机に座って  
ザ・勉強だった。

僕は勉強が、  
超がつくほど苦手だった。

勉強しているよりも体を動かしている方が楽しいという絵にかいたような  
脳筋だった。

何より、  
覚えるのが人よりも遅かった。

足し算、引き算。ひらがな。  
どれをとってもクラスで覚えたのは最後のほうだった。

特にひらがなの書きが何よりも苦手だった。

どうしても字がまっすぐ書けない。  
へびみたいにぐにゃぐにゃになる。

小学生に上がっても幼稚園の時の不器用さは健在だった。

どんだけ書いても、  
地震が起きている中書いたのではないかというくらい字が揺れていた。

ちなみに覚えるのに一番苦労したひらがなは「え」である

どうしても、「え」という字が書けなかった。

上手く書けるようになったのは小学校3年生に上がったときだったかな。

それまでは、「え」という字の形が明らかにおかしかった。

だから、小学三年生まで  
「なんか、おまえの「え」なんかおかしくね？」  
とよくバカにされたものだ。

悔しくて悔しくて仕方なかった。だけど、  
言い返そうにも返す言葉がなかった。

だからバカにされないように何度も  
「え」という文字をノートいっぱい書きまくった覚えがある。

そして暗記もダメダメだった。

例えば。九九。

小学3年生になって九九を教わるのだが、  
明らかに僕だけ覚えるのが遅かった。

九九のテストで1人1人先生の前に並んで九九を言っていく。  
というのがあった。

まず、1の段から9の段まで書かれたカードを渡される。

先生の前で、「1の段やります」や「3の段やります。」と言って、  
九九をいっていく。

それで、九九を言うコトができれば、  
その言えた段のところにシールを貼ってもらえる。というもの。

コレをすべての段を言えないと居残りになるという  
強制的なものだった。

僕にとってはこれが地獄でしかなかった。

九九を覚えるのもそうなのだが、  
僕は誰よりも恥ずかしがり屋で、引っ込み思案だった。

先生と話すだけでも緊張のあまり泣いてしまうということがあった。

先生と1対1で九九なんて、  
とてもではないが耐えられるはずがない。

簡単な「1の段」ですら、僕にとってつらかった。

心臓がバクンバクンである。

九九を言う声は震えるし、  
どんどん涙声になっていくしで最悪だった。

それに、九九を間違えてもいい直すことでOKを貰うことができるのだが、  
僕の場合、1回間違えると、緊張のあまり頭の中が真っ白になってしまって、  
何も言えなくなることがあった。

そのたびに  
「つよくん。いいよ。また来てね」や、  
「もっと、しっかり覚えてから来てね」  
と言われ

追い返される。

そして、  
できなかつた悔しさで泣く。

おまけに

後ろでクラスメイトが並んでいた時に追い返されると、

「あいつ、落ちてやんのー（笑）」

「うーわ。泣いてやんのー（笑）」

「なんで、泣いてるの？気持ち悪い。」

とバカにされた。

よく恥ずかしさのあまり何度も死にたくなかった。

とんだ羞恥プレイである。

だけど、心の中で「バカにしたテメーら、全員、いつかぶっ殺してやる」と心の中でつもブチ切れていた。

ただ。表に怒りを出すことは決してなかった。  
というよりできなかった。

恥ずかしくて。

それだけ、小心者だったから。

何度も言うようだが、僕は勉強が嫌いだった。

勉強をしても誰も褒めてくれないから。  
よくバカにされていたから。

どんなに頑張っても勉強をしてもだれも褒めてはくれる人はいなかった。



親ですら、  
褒めてはくれなかった。

僕には、上に2人に兄がいる。

兄たちは、僕とは違い  
めちゃくちゃ器用だ。

僕が、苦勞して必死に覚えた、  
ひらがなや九九を何の苦勞もなくやり遂げていた。

勉強1つとっても

すぐに重要な要点をまとめて昇華していく。  
基礎能力が高かった。

だから、  
親も僕のことを兄と同じと思っていたんだろう。

兄にできたんだから、  
お前もできて当たり前。

褒めるほどのことではない。

僕の小学生時代は常に兄と比べられていた。

だから、兄たちができたことを僕ができなかつたりすると

「どうして、お兄ちゃんにできてアンタにはできないの？」

「お兄ちゃんは、こんなテストの点数とったことないよ」

「テストの試験で落ちた？お兄ちゃんは1回も落ちたことがないのに」と言われた。

僕は兄たちの影をひたすら追わされていた。

どんなに頑張っても1度も兄たちの影に勝つことができなかった。

そんな僕を見かねた母はこう口にした。

「おまえは、誰よりも劣っているんだから、  
他の人がやったことの2倍3倍やらないといけ  
ない」

僕はこの言葉を小学生の間に死ぬほど聞かされた。

「お前は何をやってもダメなんだ。」

「お前は、不器用だから普通の人や3倍はやらないといけない。」

これが、母の口癖になるようになっていった。

それでも、始めの方は頑張れた。

僕は人よりも劣っている。

だから、頑張らないと。

自分でも分かっていた。

自分がポンコツであることを。

だから、

必死に努力した。

兄たちのような秀才にとまではいかなくても  
普通の子みたいにはなりたい。

そう思ったから。

みんなに追いつきたい。普通の子になりたい。  
その一心で勉強した。

だけど、うまくいかないことの方が多かった。

そのたびに母は。  
「つよしは本当に不器用ねー」と言われる。  
何度も。何度も。

僕の頑張りを否定するかのように。  
僕の頑張りに水を差すかのように。

不器用ねー」  
「お前は、何をやってダメなんだ」

「お前は人よりも劣っている。」

「どうしてそんなこともできないの」

「お兄ちゃんはできたのに」

色んな言葉僕の頭の中をぐるぐると回る。

泣きながら勉強したことも良くあった。  
あの時は本当につらかった。

つらすぎて

勉強することを拒んだことも何度もある。。

そして、

「どうして、お母さん、いつもそんなふうにするの？やる気が失せるからやめてよ」  
と怒った。

そしたら、母が  
「そんなんで挫けてるからいつまでたってもダメなんだよ。そこは、ナニクソ！！と思ってやらないといけないことなんだよ」

というようなやりとりを母とよくやっていた。

# できるかあ——！！

えっ？何？俺、スーパーマンか何かなの？

悔しさをエネルギー源にやる気を生み出す素敵な機能でも

ついてんの？

漫画の熱血主人公か何かだと思ってんの。

俺のことダメ人間といていたよね。

ダメ人間にそんなことできるわけねーだろ。

ボッキボッキに俺の心へし折りやがって、  
「もうやめて、つよしのライフはゼロよ。」

立ち上がる気力すらわいてこねーよ。  
俺の邪魔すんじゃねーよ。バーカ。

1人の時に何度も感情を爆発させていた。

勉強をしても、  
母が横やりを入れてくる。

それが嫌で嫌で仕方がなかった。  
そのせいで勉強からどんどん逃げようとする。

例えば、

連絡帳に今日やる宿題を書き込むのだが、

勉強をしたくなかった僕は

宿題を消しゴムで消してなかったことにする。

ということをやります。

完璧だ。なんて完璧な作戦だ。

これで勉強しなくて済む。

「やったー！！」

超喜んだ。

そして、次の日。

母に1瞬でばれる。

母に、連絡帳を見られ

母「なんでここ消してあるの？」

僕「あっそれ、（宿題が）無くなったんだよー（嘘）」

母「嘘おっしやい、早くやりなさい。」

僕「えっ!?でも時間が」AM7:30

母「いいからやれ。遅刻してでもいいからやりなさい！！」  
とキレられる

完璧な作成が一瞬で見破られ。  
泣きながら宿題をやらされる。

ということもあった。

家に帰れば勉強をさせられる。  
僕はそれが嫌だった。

だからいつも逃げるように友達の家遊びに行っていた。

家にいなければ勉強しなくていい。

友達と遊んでいるときは本当に楽しかった。  
ゲームしたり、缶蹴りしたり、鬼ごっこしたり、

辛いことなんて1つもなかった。  
本当に天国だった。

逆に僕は自分の家にいい思い出なんてない。

勉強、勉強の苦しい日々。

つらい思い出しかなかった。

自分の家から逃げたかったし、  
なにより、家がボロボロだったから家に友達を呼ぶのが恥ずかしかった。

壁紙は剥がれ、壁に穴が開いている。  
そして部屋も狭い。

「アイツの家、汚い」  
「アイツの家、貧乏なんだ」

という噂が経つのが怖かった。

だから、  
僕は友達と遊ぶときは人の家にお邪魔していた。

あの家では、僕はダメ人間。

だけど、家の外では  
普通の人間になれる。

ダメ人間扱いされない。

それどころか、  
運動が得意だったから、  
周りからちやほやされる。

それが何よりもうれしかった。  
女子にも話しかけられたりもして、最高だった。



モチキ物——(°▽°)——!!  
と錯覚もした。

小学生だと運動ができるだけでそれだけで有名人。ヒーロになれる。  
僕も小学生の時はちょっとした、有名人だった。

足が速かったから。

幼稚園の時もそうだったが、  
小学生に上がっても僕の足の速さは健在だった。

小学校の運動会でリレーをするのだが、  
6年間すべて1位。無敗である。

学年の間で

「誰が一番足が速いか」という議論がされるなかで僕の名前が上がるのが結構あった。

勉強はからっきしダメだったけど、  
運動という分野では僕は輝いていた。

さっきも言ったが、小学生で重要なことは勉強よりも運動ができるかである。  
運動さえできていれば勉強ができなくてもクラスがちやほやしてくれる。

重要度で言ったらこんな感じ。

**勉強<<<<運動**

小学生の時は、確かに苦しいこともあったがこういう。

嬉しいこと・楽しいこともいっぱいあった。

ただ、僕はこの6年間に1度も親に褒められなかった。

褒められた記憶がまったくない。

どんなに頑張っても褒めてはくれなかった。

苦手だった漢字をノートいっぱいにも何度も何度も書き写しながら

一生懸命覚えて、テストで94点という高得点を出した時でさえ、

「次も頑張って」

その一言で片付けられた。

得意の運動だってそうだ。

運動会でどれだけいい結果を出しても、

褒めるはいつも他のクラスの子ばかり。

僕のごときは少しも褒めてはくれなかった。

寂しかった。

もう少し、褒めてほしかったし。

親に甘えたかったな。

と思う小学生生活だった。

そして、小学校を卒業して中学に入学する。

中学は、小学生のような華々しい話が思い浮かばない。  
僕にとって中学生活は「苦」でしかなかった。

まず、始めに僕は中学の入学して3か月でイジメの標的になる。

いろんな小学校から集まってくる中学。

知らない人と話すのが苦手な僕にとって友達を作ることは何よりも苦行だった。

それに自分に自信を持つことができずにいた。

親に1度も褒められずに生きてきたことで自分に自信を持つことができるはずがない。

そのせいで、  
地味で、おどおどしていて挙動不審。

しゃべる時も自信な下げにぼそぼそとしゃべることしかができなかった。

見るからに弱そう。

そんな印象だったと思う。

いじめっ子からしたら格好の的だった。

いじめっ子はそこを見事に突いてきた。

僕がやられたイジメに内容をまとめると、

- ・授業中消しゴムのカスを投げられる。
- ・ノート・教科書を隠される。
- ・ノート・教科書に落書きされる。
- ・授業中に写したノートを消しゴムで消される。
- ・授業中、先生が黒板に書いている時に叩かれる。ちょっかいかけられる。
- ・机に落書きされる。油性で書かれたことも。
- ・筆箱を2階の窓から捨てられる。
- ・スリッパを隠される。⇒中学の時は下ばきではなくスリッパ。
- ・スリッパを破壊される。
- ・プリントをぐしゃぐしゃの状態に渡される

- ・シャーペン盗まれる。
- ・休み時間にサンドバック。
- ・給食中、いじめっ子の嫌いな食べ物を私のお皿に投げ込まれる。
- ・スリッパを女子便所に入れられる。

などなど、いじめで代表的とされることは基本やられた。

当然周りは助けてくれない。

逆に僕がそのいじめっ子に反抗したりすると、

「ちょっと、何で〇〇イジメてんの？」

「いいやんそれくらい、怒ることでもない」

「ちょっと、〇〇がかわいそうでしょうー」

と僕ではなく、いじめっ子をかばったりもされた。

授業中もそうだ。

黒板に書かれている所をノートに写している時

いじめっ子が何度も消しゴムで写した個所を消されることがあった。

さすがの僕も反抗した。

そしたら

いじめっ子「先生～。ツヨ君が授業の邪魔をしてくれます～」

僕「いや・・・違っ・・・」

先生「はいはい。静かにしてねー」

ということになる。

そして、周りから「クス・・・クス・・・」

と笑い声が聞こえる。

ものすごい惨めだった。

クラス全員が敵にしか見えなかった。

「全員死ね！！」とさえ思った。

その他にも

僕も我慢の限界だった時に

「そんなことやってるんだから、友達いないでしょー（笑）」

とバカにして反抗したことがあった。

そしたら、向こうもがキレた。

顔が真っ赤になっていた。（煽り耐性なさすぎだろ・・・）

そしたら、僕の机に歩き出し、唐突に机の中を物色する。

そして筆箱をみつけ、窓から筆箱を捨てる。

マジかよ。コイツ。

ここ2階やぞ。

しかもその日、雨でべちょべちょ。

最悪すぎる。頭おかしいやろアイツ。

そう思いつつしかたなく、

筆箱を探しに行った。

筆箱を見つけたのはいいもの、2階から落ちた衝撃でシャーペンやら消しゴムやらが飛び出して、雨に当たってぐしょぐしょに。

はあ、

とため息を吐き。散らばった文房具をひたすら筆箱に詰めていく。

雨に打たれ、制服を雨に濡らしながら

ようやく筆箱に文房具を詰め込んだ僕は

教室に戻る。

そして戻ってきいたら、

今度は私の教科書、ノートがゴミ箱にボッシュートされていた。

マジでやめてくれよ・・・

反抗するのやめよと思った。

僕の心は完全に折れた。

それから、

「我慢さえしていればいつか終わる・・・」そう思って我慢し続けた。

だけど、いじめは一向に収まることはなく。

いじめが半年間経とうとしたとき、  
僕の心はすでにボロボロだった。

夜寝るときにいじめられていることを思い出し、  
不安と恐怖で眠れないということがかなりあった。

寝るときに

自分の惨めさ。

現状を打破できない自分の愚かさが悔しくて悔しくて何度も泣きながら寝る。

「なにがダメなんだよ・・・」



「今日も何もできなかった・・・クソ」

と何もできなかったことを嘆くばかりだった。

今まで我慢してきたけどもう限界・・・

助けて・・・

そして、

藁にもすがる思いで親に相談した。

正直、相談するのはめっちゃくちゃ嫌だった。

1度も僕を褒めてくれなかった親。

そんな親が僕のことを本当に助けてくれるのかという疑問があった。

それでも相談もとい助けを求めないと僕がやばいことになる。

死ぬ。と思った。

もうなんでもいいから助けてほしい。

その一心だった。

この地獄から抜け出したかった。

そして僕は勇気をもって母にいじめられていることを告白した。

そしたら、

母

「やめてって言えばいいじゃない。やめてって言えばやめてくれるわよ」

は？

母

「やめてって言わないから、そうやって何度もいじめられる。だから、やめてって言えばやめてくれるよ。」

僕「・・・・・・・・」

さすがに言葉を失った。

なーに言ってんだこいつは・・・

やめてと言えればいじめをやめてくれる？

そんなことはずっと前から言ってる。

こんな私でも「イヤ」とくらい言える。

それどころか反抗もしてるんだよ。

そもそも、「イヤ」「やめて」といって、

それでやめてくれるのなら半年もいじめられるわけねーだろ。

この時、初めて親がバカなんじゃないかと疑った。

意味不明すぎる。

マジでビビった

親の頭がお花畑すぎる・・・

あきれてものも言えなかったのを今でも覚えている。

母は、子供のすることだから、

と舐めていた。

子供だからみんな素直なものと信じて疑わない人だった。

僕はいままで、親をなんでもできる人。すごい人だと思っていた。

親の言うことは正しい

だから、僕も親の言うことを素直に聞いていましたし、  
反抗することもなかった。

例え、親が僕のことを「ダメな子」と言っても、  
親が言うんだから僕は「ダメな子」なんだと。  
受け入れていた。

しかし。今回の1件で

**親＝絶対正義**

といった価値観が崩れ去った。

もう・・・ね。

アホだろとしか思わなかった。

「やめて」といってやめるいじめっ子は皆無だろう。

逆に何もしてこないことをいいことに余計に調子に乗り、  
いじめがエスカレートしていくのが大半だろう。

僕みたいに。

子供だから。

楽しいことはどんどんやる。

それがたとえ、いじめでも。

自分が楽しければそれでいい。

それがいじめっ子の心理だと思っている。

弱いものをいじめて自分が優位に立つ。

自分の方が上だ。

そうやって自己承認欲求を高めていく。

気持ちいいことでしょう。

相手の上に立つことは、

楽しいでしょう。惨めにいじめられている奴らを見るのは。

いじめっ子がよく使う言い訳で  
遊んでいただけ。じゃれていただけ。

ということをよく言う。

そして、いじめがどんどんエスカレートしていく。

じゃれていくことがやがて暴力になり、  
遊ぶことがいじめになっていく。

正直、いじめは殺人だと思ってる。

言いすぎかもしれないが、

いじめをしている奴ら全員死ねばいいとさえ思ってしまう。

そして、親に相談しても特に何の解決することはなく、  
学校でいじめられ続いた。

それから、1か月くらいしてから、

救いの手が差し伸べらる。

3者面談です。

3者面談をするというプリントを貰った。

このとき、閃く。

「そうだ。先生だ。担任の先生なら何とかしてくれる。親はあれだったけど先生なら何とかしてくれる」

そう思った。

だけど、

いじめっ子達にチクるなよとも言われていて怖かった。

イジメのことを話すことでまた、

いじめが激化するんじゃないか。

さらに殴られるんじゃないか。

不安で不安で仕方がなかった。

だけど、それ以上にどうにかしてほしかった。

毎日がいじめのストレスでどうにかなりそうだった。

親に行っても何も解決してはくれず

もう諦めていた。

だけど、、

先生なら

先生なら今度こそ何とかなると思った。

これでもう大丈夫。いじめられなくて済む  
助かるんだと。

1度も先生に助けを求めなかったわけではない。

助けをもとめようとはした。

だけど、

いじめっ子が邪魔してくる。

僕「先生。たすく」

いじめっこ「先生一村田さんがいじめてくるー」

という感じだ。

助けを求めたとしても邪魔される。

だけど、3者面談なら邪魔される心配がない。

はやく助けてほしい。

そして、3者面談当日。



担任の先生に僕がいじめられていること。

僕がされてきたいじめの数々を話した。

途中、いじめられていることを思い出し、

悲しくなって泣きいた。

涙を流しながら先生にすべてを話した。

そしたら、先生も分かってくれたみたいで

「そうか・・・よし、そいつらを見張っとくから安心しろ」  
と言ってくれた。

めちゃくちゃうれしかった。

これで、これで。

やっとあの地獄から解放される。

もうつらい思いしなくてもいい。

ノート・教科書を隠されなくて済む。

授業を普通に受けられる。

叩かれずに済む。

給食の野菜が飛んでくることもない。

だから、

うれしかった。

これでやっと普通の生活に戻ることができる。

もう全部終わった。

苦しいことは終わったんだ。

と安心しきっていた。

その日は家でぐっすり眠れた。

しかし、喜んでいられたのは、そのときだけだった。

そして、次の日

さっそく、イジメは発生。

「よーし。先生が助けてくれる。」

そう思っていた。

だけど、先生は一向に現れない。

助けてくれない。

あれ？

なんで？

もうパニックです。

あれだけ話して、助けを求めたのにも関わらず

先生は一向に助けにこない。

見張っておくといったのにまったく見張っていない。

それどころか無視をする。

助けるはおろか何もしてくれなかった。

ちょちょちょーい！！。

話違うやんけ。

頭の中は、

絶望でいっぱいになる。

えっ？何？

何もしてくれないの？

もう何が何だか分からない。

僕はそのままいじめられた。

なんだよ・・・

助けてくれるっていったじゃないか・・・

あれは嘘だったのかよ・・・

クソが・・・

僕はこのとき親も先生も見限った。

今まで親や先生は色んなことを知っていた。

だから、先生や親を神だと思っていたし、

先生んいうことや親の言うことは正しいと思っていた。

だからこそ、

僕は先生のいうことや親の言うことを素直に守ってきた。

それが正しいんだと。

だけど、違った。

親も教師も神なんかじゃない。

自分と同じ人間。

クソだと思い始める

そして、自分の考えの甘さを反省する。

僕は人に頼り過ぎていた。

人に頼ったとしても助けてくれない。

だから自分で何とかしなくては。

所詮は他人事。

結局は自分が何とかしないとイケない。

だれも自分を助けてくれない。

だから。自分が強くならなくては。

本気でそう思った。

イジメられている人間にも原因があると言われていたがそんなものは、  
イジメている側の言い訳でしかないと思っている。

もし昔に戻ることができたなら、

「そいつは、殴っていい。そうしないと余計ひどい目に遭う。お前なら余裕で  
勝てるから安心しろ」

と言いたい。

とにかく、反撃してほしい。

それが何よりの願いだ。

あの時反撃していればよかったと深く後悔しています。

そうすれば、あの時よりはマシな中学生生活が送れたと思う。

この話をしていると永遠に話が続きそうなので、

ここで、一旦、

いじめられていた話はここで区切ろうと思います。

それで、次。

僕の中学生生活がいじめだけが原因で「苦」となったわけではありません。

イジメの他に僕を苦しめていたもの。

それが「部活」。

部活と聞いて皆さん何を思い浮かべるだろうか。

青い青春？甘酸っぱい恋？熱い友情？

どれも素敵な言葉ですね。。

学校生活の醍醐味と言ってもいい。

だが、僕の入った部活はそんなものではなかった。

僕が入った部活はバレーボール部

皆さん。バレーボールと聞いて何を思い浮かべるだろうか

「レシーブ♪トース♪アタック♪」



と女子たちがきゃぴきゃぴしながらバレーボールをしている姿を思い浮かべる  
ことだろう。

しかし、実際にはそんなものは存在しない。

部活のバレーボールはかなり醜い。

どれだけ自分がミスらずに他の奴らにミスをなすりつけるか  
そんなスポーツに変わる。

自分のせいで ミスをしたら、

先生、コーチから罵声を浴びせられる。

それだけじゃない。

チームメイトからも白い目で見られる。

キレられる。

連続でミスをしたときは生きた心地はしない。

だから、僕は自分のせいで点が取られないように細心の注意を

払っていつもプレーしていた。

先生に怒られないようにコーチに怒られないように。

勝ち負けよりもどれだけ怒られないかの方が重要だった。

僕の入った部活では、

試合で勝つことが正義。

勝つことがすべてだ。

みたいなスポーツ漫画の強豪校みたいなことを言う部活だった。

当然練習も厳しい。

中学生活の大半を部活に費やす。

家にいる時間よりも部活している時間の方が長い。

女っ気なし、恋する時間すら与えられない。

中には、

部活に集中したいという理由でカップル解消した奴さえいる。

バレーボールが彼女だった。

そして、

友情なんてものも存在しなかった。

誰かがミスれば

「何ミスってんだよ」という冷たい言葉が飛び交う。

チームプレイなんて欠片もない。

団体スポーツなのに個人スポーツ。

そんな部活だった。

さらに練習が厳しいだけに休みも皆無だった。

休み？ないそれおいしいの？

典型的なブラック部活だった。

毎日、朝の6時に起床し、

6時45分に家を出て30分かけて、歩いて登校。

朝練をする。

そう、すでに朝から部活をするのである。

そして、朝練が終わってようやく学校が始まる。

そして学校が終わったら、また部活が始まる。

16時から始まって終わるのが19時。

そして、30分かけて家に帰る。

これを月曜日から金曜日まで繰り返す。

超エライ。

疲れて帰ってきて、

ご飯食べる気力もわかないくらいクタクタで。

それでも何とか、

ご飯を流し込んで寝る。

そして、6時に起床する。

そんなサイクルが月曜日から金曜日まで続く。

そして土日。

土日もっとひどい。

字

朝9時からスタートで終わるのが17時~18時くらい。

8時間くらいずっとバレーしていた。

ずっとバレー付けの生活だった。

わざわざ、練習試合をするために県外にもよく行っていた。

週に1回は県外にいった試合をしていた。

ずーっとバレーやっているとね。

ぶっちゃけ飽きる。

どんなに好きなことでもずーとやっていればさすがに飽きるよ。

好きなものをずーっと食べてるとあきるでしょ。

それと同じですごく嫌になる。

何回辞めようかと思ったことか。

なによりつまらなかった。

練習をしても練習をしても上達する気配が全くなかったんですよね。

周りはずうまくなっていくのに自分だけうまくなれずにチームの足を引っ張っていた。

そのせいで先生やコーチに怒られる。

それが嫌で嫌で仕方がなかった。

それと、普通に体罰があった。

ビンタされるは、イスは飛んでくるは、  
ボールを思いっきりぶつけてくるは。

そんなものは日常茶飯事だった。

実際に僕。

試合中、捻挫をしてしまって大会に出られなくなった。

ということでビンタされて鼓膜破れました。（笑）

あっ、今はちゃんと治って普通に聞こえますよ。

ただ、鼓膜が破れると平衡感覚がなくなってまっすぐ歩けなくなるんですよ。

ちなみに親は、何も言わなかった。

親は、僕が何か悪さをしてビンタされたと勘違いをしていたみたいだ。

それで、真相を知ったのが遅れてしまい。

怒るタイミングをのがしたそうな・・・

そして、最終的には、「まっいいか」となったみたい。

俺の存在価値って・・・

それと、部活で忙しすぎて、

勉強をする時間がマジでなかった。

よく学校だと、テスト期間というものがあると思う。

その期間はテスト勉強に集中するために部活が休みになるというあれである。

そして、僕の中学校にもそのテスト期間というものもあった。

ただ、我がバレー部はそんなものは通じない。

部活はだめでも、クラブでならバレーはできる。



よし、「クラブ」としてバレーをするぞ。

ということで、クラブを立ち上げる。

「テスト期間？何言っているのですか、これは「クラブ」っすよ」  
ってな感じでテスト期間中もバレーをさせられる。

何でこんなことにばかり頭が回るんだろうか・・・

そのせいで、僕は、

いや、僕らバレー部はテスト期間中もバレーをやらされる羽目になった。

テスト勉強をせずに挑んだ実力テスト。

5教科合計200点を切ったときはさすが泣いた。

英語で27点を取ったはさすがに乾いた笑いがでた。

そして、

中学3年生になり、地獄の部活から解放されて天国が始まると思ったが  
今度は受験が始まる。

僕自身の成績は可もなく不可もないといった感じ。

英語 27 点でも（笑）

たしかに 1 時期、5 教科合計 200 点とか取っていたが、いつもは、ちょうど、クラス平均くらいに収まる、大体、5 教科合計 250 点～300 点をフヨフヨしている感じ。

成績もオール 3。

ザ・普通である。

ただ、これでも勉強はしていた。

睡眠時間を削って何回も何回も繰り返し勉強した。

それでも結果が出なかった。

頑張りに対して、成果が微妙だった。

だから、いつも期末テスト、実力テストの後は落ち込んで家に帰った。

テスト後は、いつも泣きながら寝ていた。

そして進路なのだが、

進学する高校は初めから決めていた。

それは、工業高校。

なぜこの高校を選んだかっていうと、まず、家が近かったから、  
自転車で10分という距離。

それと、僕のレベルでちょうど行けるのがこの高校だったということ。

偏差値44（笑）

そして、工業高校特有の推薦枠を狙うため。

この推薦枠を得られれば簡単に大学に進学することができる

大学受験は面接と小論文だけでOK。

テストは省略という優れもの

僕はこの大学推薦を貰うために工業等高校を狙った。

僕は大学にスゴイあこがれを持っていた。

というのも、兄が大学に通っているのをみてすごく楽しそうだったから。

人生を謳歌しているそんなふうに見えていた。

だから、僕も大学に行きたい。

そう思った。

そのためにも推薦枠をゲットしてやるぜ。

という目論見があった。

そして、高校受験。

予想以上にできた。

なにより、記号で答える問題がパーフェクトと言っていいほどにできた。

なぜそれが分かったのかというと、

頭の良い人たちと僕の回答が記号で答える問題だけ見事にシンクロしていた。

これは、勝った。

「もろたで工藤!!」→分かる人いるかな？

もう受験はもらったと確信した。

受験から解放された僕はゲームにのめり込む。

当時はモンハンにはまっていた。

そして、受験発表当日。

高校受験の発表というのに

僕は、安定してモンハンをしていた。

この時は、老山龍を狩っていたのを覚えている。

学校のホームページで合格者の番号を見れるということで

パソコンで受験番号をチェック。

そしたら、自分の受験番号がポンと出てきた。

よっしゃー合格やー。

狩るぜー老山龍。

というのが、受験発表当日の出来事である。

無事、高校も決まり、中学の卒業式。

泣いている人が結構いたが、

僕はとてもじゃないが泣けなかった。

中学生活が苦しすぎた。

入学早々いじめられるは。

部活で休みなくバレーをさせられるは、

勉強もできないわ。

ぶっちゃっけ中学生活はつまらなかった。

良かった点と言えば、

中学のときの部活メンバーが大人になった今でも年に数回集まって

みんなで仲良く飲み会を開いている。

そのくらいの仲間ができたことは今でも感謝している。

そして、中学を卒業して高校に入学する。

高校生活は通学の時とは比べ物にならないくらい天国だった。

何よりイジメてくる奴が誰もいなかった。

授業が普通に受けられる。

それだけでもかなり感動した。

まじかよ、殴ってくる奴がいない。

ノートを消しゴムで消してくる奴らもいない

そしてなにより、授業が簡単だった。

これは、

工業高校特有な現象で、一般教科の内容がめっちゃ簡単になる。

中学1年で習ったことを高校1年で復習するって感じになります。

例えば

英語だと、なんと Be 動詞から始まる。

数学も現代文も歴史すらも中一の範囲。

超簡単だった。

だから、

解ける。解けるぞ。問題が。

で解けて当たり前のような問題でも

解けることが何よりもうれしかった。

そして、

次第に問題を解くのが楽しくなってくる。

勉強嫌いだっただ僕が勉強好きになった瞬間である。

もう、勉強が楽しくて楽しくて仕方がなかった。

1つの問題が出てきて問題を解く。

そして、答え合わせをする。

そして合っていた時のあの快感。

たまりません。

間違っていた場合でも、

「あれ、どこでミスった？」

「ああ～ここか～よしもう一回やるか」

となっていた。

勉強がゲームみたいで楽しかったです。

強敵（問題）を倒すために勉強して経験値を貯める。

って感じでどんどん自分が強くなっていく感じがしてたまらなかった。



このときは、めちゃくちゃ勉強した。

2時間とか普通に勉強した。

中学のときの僕が知ったら驚くであろう変わりっぷり。

そして、そうやって勉強しまくって挑んだ期末テスト

英語 94点

数学 88点

現代文 90点

社会 94点

物理 100点

なんじゃ、この点数。

つか、100点？

嘘やろ。

正直、目を疑った。

この俺が100・・・(°Д°)

自分を疑った。

中学の時の最高の点数が72点だった。

しかもそれ以降は取れても60点・・・

そんな僕が100点を取った。

うおっしゃ——！！

飛び跳ねたくなるぐらいうれしかった。

マジか。俺もやればできるんだ。

それが何よりもうれしかった。

いままで、勉強は自分にはできないものばかり思って諦めていた。

でも違った。

僕でもやればできるんだ。

そうして、僕はどんどん勉強に打ち込んでいくようになる。

自分でも 100 点が採れる。

ダメ人間じゃなかったんだ。

頑張れば僕でもできるんだ。

ここならば僕も変われるんじゃないかと思い始める。

そして、どんどん勉強するようになる。

テスト期間中はずーと家で勉強した。  
休日も部屋に閉じこもってずっと勉強した。

不思議と苦にはならなかった。  
それよりも自分にもできるんだ。

自分の可能性の広さを知ることができたことが何よりもうれしかった。

自分は努力次第でなんにでもなれる。

そう思えたからこそ、勉強が苦になることはなかった。

そうやって勉強していくと、テストの点数で平均90点とか採れるようになってくる。

それでまた、快感を覚える。

もっと、高みへ。さらに上へ。

自分を高めることに夢中になってく。

それでまた、勉強するようになるというループに入ります。

そうやって僕は高校で優等生になった。

そうやって、  
優等生になると、まわりの反応が変わってくる。

まず、先生の私に対する態度が優しくなる。

明らかに僕に対して甘いのだ。

僕の学校では頭髪チェックというものがあり、

要は、髪の毛が長いと切ってこいと言われて自分の名前の欄にチェックされる。

しかし、僕は明らかに他の人に比べて検査が緩かった。

明らかにアウトだろと思っけていてもセーフで通ったこともある。

周りからも「なんで。あれがセーフなんだ」と不思議がられた

先生が僕の味方になってくれる。

何を言っても先生が僕のいうことを信じてくれる。

マジ優等生って便利やはと思う。

次にクラスメイト。

天才と思われるようになる。(笑)

勉強を教えて欲しいと言われた時はマジでビビった。

「えっマジ？Σ(°Д°)」

「私でイインデスカ？」

と思わず聞き返したほど。

だけど、みんなは、僕のことを本気でそう信じている。

あるとき、期末テストで調子がいい時があって、  
全教科平均が94点とかなったことがある。

この時は、100点を結構連発した。  
9教科で3つくらいとったことがある。

テストの点数で僕が常に1番だった。

このときから僕は  
「テストの解答」  
と呼ばれるようになる。

どうもテストで高得点ばかりたたき出す僕の答えは「答え」なんじゃねーの  
みたいに思われこの名前が定着する。

この話をすると、  
おまえ、もともと頭が良かったんじゃ・・・  
みたいに言われるのですがそんなわけではないです。

僕はバカです。

英語で 27 点を取るような奴が頭いいわけありません。

それに僕の通っていた高校の偏差値は 44。

底辺と言ってもいい。

おまけに他の学校からは、

オタクと不良のたまり場とさえ言われるほど。

まず、ちゃんと授業を受けている人がいない。

みんな、授業中ゲームしたり、寝ていたりしている。

まともに授業を聞いている人の方が少ない。

ひどい奴らなんか、授業中に麻雀してる奴らさえいる。

そんな高校です。

普通に授業を受けていれば 80 点は取れる。

そのくらいのバカ高校。

すごくもなんともない。

ただ、こんなバカ高校でも僕に変われる機会をくれた。

クラスメイトに頼られ、先生にも頼られ、

僕は明らかに変わることができた。

あれだけ、何もできずにいじめられていた自分が  
今では頼られる存在にまで変わることができた。

人は変われるんだと実感した瞬間だった。

それで、勉強が楽しくなったので大学に行ってもっと勉強しようとも思うよう  
になる

最初は、ただ何となく大学に行く。

という理由で高校に進学したのだが、

大学に行ってもっと勉強したい。

もっとちゃんと勉強したい。

と思うようになる。

だが、その思いを無に帰すような出来事が起きる。

高校2年の時、

僕の父が会社をリストラされた。

家族の為に頑張り続けた父がうつ病になって休職、  
何を思ったか、父はその休職期間に会社に内緒でアルバイトをし始める。

そしてそれが会社にばれて、クビになった。

父がリストラされたことで問題になってくるのがお金の問題。

僕を大学に通わすだけのお金がないと言われる。

それどころか、生活するお金も微妙。

だから、両親は進学ではなく就職してくれと言ってくる。

働いて家に金を入れてくれ。と。

ふざけんじゃねー。

なんでテメーのしりぬぐいを俺がしなければいけないんだ。

マジで腹が立った。

僕は反抗する。

「絶対いやだ、大学行く」



母「大学なんていつでも行ける。働いてお金を貯めてから行きなさい」

父「大学に行くことが必ずしも正しいとは限らない。社会を知ることも大切」と言い出します。

毎回毎回これの繰り返し、

僕も嫌になって折れます。

折れて就職することを選びます。

かなりショックだった。

僕の人生はなんか親に振り回されっぱなしだなーとしみじみ思うようになる。

小学生、中学生、高校と。

全て親に振り回されっぱなし。

奨学金を借りるという手段もあった。

ただ、日本の奨学金は海外の奨学金と比べてクソということを知っていた。

海外の奨学金の奨学金は借りても借りた分は返さなくてもいい。

又は、利息なんか付かない。

しかし、日本の奨学金は普通に利息が付く。

借金と何ら変わらない。

僕の知人で大学出たら、

300万の奨学金を返さないといけないと嘆いていた。

300万って・・・

大学でて、即借金が300万とかやられてられない。

しかもそこから、利息が付くという。

ヤクザと何も変わらない。

子供たちを食い物にしている。

そんなところにやっかいになるのはマジ御免だ

大学卒業したら就職できるとも限らない。

ただ、借金を作るだけというリスクにチキってしまった。

私の成績がよかったおかげで就職先は選び放題だった。

まあ、僕の心は最悪だったが。

そして、僕は就職の道を選んで高校を卒業していくことになる。

この選択が私の心を壊すとも知らないで・・・

就職難ともいわれていますがすんなりと就職することができた。

だけど、僕は1ミリもうれしくはなかった。

ああー早く辞めてーなとさえ思った。

僕はもっと勉強がしたかったのになぜ？

と過ぎたことばかりを考えていた、

そして、親を恨んだ。

なんで親の都合で僕が振り回されなくちゃいけないの？

と、

それで、深く考えてもなんの解決にもならない。

そう思った僕は

とりあえず、この仕事を乗り切ろうとがんばり始める。

仕事をしていて思ったこと。

それは、

なんじゃこりゃ。

これが仕事？

こんなこと毎日やってるの？  
という疑問。

アホなんじゃないと思った。

ずーっとな同じ作業を繰り返しているだけ。

マジでつまらない。

こんなことを後40年もやり続けなといけないの？  
と絶望もした。

良くみんなこんなの続けられるなと感心したほどである。

社会人ってスゲーって感動した瞬間でもあった。

ただ、働いている人の顔をよく見てみると、

なんだか生気が感じられなかった。

常にムツとしているような人たちばかり。

機嫌悪そうに仕事をしていた。

そして、仕事のやり方を教わりながら、実際に仕事をする。

どんなに学校の成績がよかろうが

基本スペックは不器用のポンコツ人間。

勉強ができるようになったというだけで。

基本はダメ人間のまんま。

当然。仕事もうまくいくはずない。

何度も同じようなミスを繰り返す。

1回の説明だけでは理解することができず、

何度も質問してしまったりもした。

そうやってミスをしていると相手側（指導員）もイライラしてきて。

「なんでできんの？」と聞き返してくる。

「いや、知らねーよ」と言い返したいが。

相手は目上の先輩そんなことを言えるはずもなく。

「すみません・・・」と謝ることしかできなかった。

ミスをするたびに「なんでできんの？」といわれ、

ひどいときは「っち」と舌打ちをされる。

そんな日が毎日続いた。

始めのうちは「教えるのが下手なだけやん」といきがっていましたが、  
1か月、2か月していくうちに

どうしてできないんだろう。

ほんと私はダメ人間だな。  
と超マイナス思考になっていました。

性格が変わりすぎてお前だれやねん。

というくらい変わりはてた

学生から社会人になったという環境の変化。  
初めての仕事。  
ミスを連発する自分が嫌になる。  
先輩の恐怖。  
未来への不安。  
自分の存在価値の消失。  
自分の希望とは違った進路にされた戸惑い。

いろんな要素が一気に僕に襲い掛かってきた

僕はこれららのストレスが原因でまったく眠ることができなくなってしまっていた。

寝たら朝になる。  
朝になったら仕事に行かないといけなくなる。

寝たくない。  
そう思うようになっていった。

眠ることが何よりも怖かった。

1日2日くらいならまだ何とか耐えました。

しかし、3日4日となると体が当然持たなくなる。  
それでも怖くて眠れない……

そんなことを繰り返していた僕は気が付けば、  
恐怖で1睡もすることができない体になっていた。

実家暮らしということもあって、  
さすがの親も僕の心配してくれた。

あの親がですよ。

中学のときろくに助けてくれなかった親が私の心配をしてくれた。

それだけ当時の僕はやばかったんでしょう・・・

僕は、いつしか怖くて1人で眠れられなくなってしまっていた。

両親と同じ部屋で眠るということによってようやく眠ることができた。

ひどい時は親の手をつながないと眠れないほどに僕は衰弱していついていました。

もうすぐ二十歳の大人が親と一緒にないと寝むれない

気が付けば僕は幼児退行をしていた。

さすが両親もやばいと思ったんでしょう。

私の身体を心配した母が精神病院を勧めてきました。

めちゃくちゃ嫌でした。

精神科なんて、頭のおかしいやつが行くところという偏見があった。

だから、恥ずかしくて行きたくない。

だが、

「今のアンタは明らかにおかしい。」

という、母の一言で

「（え？俺ってってそんなにヤバいの？）」



このとき僕はヤバさに全く気が付かなかった。

あの母がそこまでいうのか。

私がいじめられても何もしてくれなかった母がここまで言うのは相当ヤバいなと改めて自分のヤバさに気づき勇気を出して精神病院に行くことになる。

特にうつ病とは診断されなかったが、

それでも、パニック症状に近い症状があると言われた。

とりあえず、睡眠薬と、精神安定剤をもらい家に帰る。

クスリの効果は抜群で、睡眠薬を飲めば、すぐに眠れたし、

パニック状態。不安で心臓のドキドキが収まらなくなったときも精神安定剤早を飲むことでなんとか抑えることができていた。

会社でも何度もパニックになりそうになるがこっそりと、

精神安定剤を飲んで乗りきっていた。

そんな生活が続いてから何も面白いと感じなる。

おもしろいバラエティーを見ても何が楽しいのかがわからなかったり、自分の趣味に没頭しようにも常に自己否定が頭をかすめる。

ガキ使のわらってはいけない〇〇があると思うが、あれを見ても全く笑えなかった。

何が面白いのかが全く分からなかった。

当時それだけやばかった。

当然、夜も眠れません。（睡眠薬を飲めば眠れる）  
親と一緒にでも眠れない。

何日たっても私の心が晴れることはなかった。

「私はダメ人間なんだ・・・いない人間なんだ・・・」  
と常に頭の中で考えていた。

そしてある時期から

常に「死」を考えるようになる。

「私はダメ人間なんだ・・・死にたい・・・いない人間なんだ・・・死にたい・・・」

というように「死」がちょくちょく挟まれていく。

常に死が隣りにいるというような感覚だ。

インターネットをつかって、「死に方」「自殺」と何回も調べて始めるようになる。

次第に死について考えるとなんだか安心ようになっていく。

心がスッと軽くなるような感じがするんです。

そしてとうとう、

**死こそが救いなんだ。**

と思うようになります。

頭おかしいです。

完全にイっちゃってます。

おかしいと思いますよね。

当時の僕はそれだけ壊れていたんです。

人間にとって死は恐れるもの。

だけど、僕は死こそが希望なんだと思うようになっていた。

死ぬことこそが正義。  
死ねば何もかもが解決する。

そう思うようになっていた。

そうやって、

自殺のことを考えていると、実際にやって見ようと思いはじめる。  
だけど、あんまり苦しいのは嫌だなとも思う。

まだ、そのくらいの心は生きていた。

そして、実際に自殺の計画を始める。

どうやって死のう・・・いつ死のう・・・

いろいろと考えるのもめんどくさくなった僕は身近なもので死のうとする。  
「ベルト」である。

僕はベルトで首を絞めて死ぬことを選ぶ。

そして、いつ死ぬか。

何か特別な日の方がいいと思い誕生日に決めた。

時期的にも近かったというのもある。

ちなみに、僕の誕生日は 4/11

それから誕生日までのあいだ、  
何かとお墓参りすることが増えた。

僕の家から墓地までは歩いて 5 分もかからないくらい近場になる。

そして、お墓の掃除をささっとしてその後に墓参りをする。

「もうすぐそっちに行くかもしれないからよろしくね」

と。

ほぼ毎日、お墓に通った。

そして誕生日。

近くにあったメモ帳に「先立つ不孝をお許してください」と書き込み  
いざ死のうと決めて首にベルトを巻く。

「よし・・・いくぞ！！」

とベルトを締めていく。

そしてベルトが首を絞めだして苦しくなりだした時、

異変に気づきます。

「あれ．．．．なんで．．．」

僕は涙を流していた。

そしてこれ以上ベルトを締められなかった。

急に死ぬのが怖くなったのだ。

僕は急いでベルトを首から外して投げ捨てた。

よかった。生きてる。

という安心と。

そうか．．．死ねないのか．．．

と落胆もした。

それから、生き地獄である。

生きることが苦痛にもかかわらず、

死ぬことさえ許されない。

いっそのこと誰か僕を殺してくれないかな。

とさえ思った。

それから、

僕は常に自分が殺されることを望むようになる。

自分では死ねないから殺してもらおう。

僕はこの時から死にたがりになった。

出社中に事故になって死なないかな。

誰か僕を殺してくれないかな？

毎日そう思うようになっていった。

そして、それから月日が流れ、

死んだ目でインターネットで自殺を検索しまくる。

そしてある動画で目が留まる。

たまたまインターネットビジネスというものに出会ったんです。

ユーチューブで「自殺」、「死に方」と調べていたら

ネットビジネスだけで月100万稼ぐ人の YOUTUBE を見つけます。

始めは、

あ〜。良くある詐欺の奴かー。

って疑いました。

だけど、

ネットビジネスをして人生が変わった人の動画を見て、

衝撃を受ける。

何と彼もまた、

人生に絶望していた人だったからです。

貧乏が原因で小学生の時にいじめられ、

中学の時に引きこもりになる。

親からの愛情を受けずに育つ。



僕よりも壮絶な人生を歩んでいました。

僕と同じ人生に絶望しながらも、

頑張っ立ち上がって成功している彼がめちゃくちゃ眩しく映ったんです。

僕もあなりたい。

しあわせな人生をつかみたい。

本気でそう思うようになります。

この地獄から抜け出せるかもしれない。

絶望の淵にいた僕に光が差します。

それから、

僕はネットビジネスを始めるようになる。。

始めは何が何だか分かりません。

ブログを作る。

ワードプレス？何それ

ドメイン？なんじゃそりゃ。

という感じで右も左も分からない状態からスタートする。

当然。始めは稼げなかった、

どんなに記事を書いてもものは売れないは、

人は来ないはでかなり苦労した。

ネットビジネスの教材を買ってもまったく稼げずにめげそうになった時も当然あった。

稼げなかった時期というのはいろんな意味で苦しかった。

「本当にこのままやっていていいのか」、

「俺には才能がないからやめた方が良くないか」

「今までやってきた時間が無駄になるんじゃないか」

色んな不安を抱えながらこの1年半という時間を過ごしてきた。

成果が出ないのに頑張り続ける。

かなりの苦行だった

だけど、不思議と死のうなんてことは考えなくなっていた。

いつか僕が自由を手に入れ人生を謳歌する姿を見たい。

僕もあの人みたいに自由になりたい。

人生に希望を持つことができたからこそ。

自殺という選択肢がなくなっていた。

なにより、ネットビジネスをしたことで僕の日々が充実していった。

いままでは、何をするにしてもつまらなかった。

することと言えばネットで死に方を検索するくらい。

そんな自分にも生きる目的ができ。

その目的に向かって

どうすれば稼げるんだろうと常に考えることが楽しかった。

そしてそれから、1年半が経ちようやく20万円という金額を稼ぎ出すことに成功する。

この時はめちゃくちゃうれしかった。

こんな僕でもできるんだと。

諦めなくて本当によかった。

あのとき死ななくて本当によかった本気で思う。

今も、より利益が上げられるようにネットビジネスに力を注いでいる。

そのために、時間もお金も投資し続けている。

僕の目標は脱サラ。

僕の自殺の原因を作った会社を

さっさとおさらばしたいと思っている。

そのためにも僕は努力し続けている。

あっ

ちなみに今も会社に振り回されている生活が続いています。

部署移動によって働く場所も勝手に決められ、

寝る時間さえも会社に決められている状況である。

おまけに人手不足で毎日ひいひい言いながら働いている。

世の中の中の大半の人が僕と同じもしくはひどい労働環境で働かされていること  
だと思います。

中には、僕のように死にたいと思っている人がいるかもしれない。

そんな人たちが、

このレポートを通じて、

少しでもいい方向に未来が切り開けたらなと思います。

最後の方が駆け足になってしまいましたが、これで僕の自己紹介を終わりたい  
と思います。

ここまでの読んでいただきありがとうございました。